

【熊本国税局長賞】

暮らしをつくる税

宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校

三年 横山 恵都

私は昨年、イギリスへ旅行に行った。初めて訪れる外国には日本にない街並みや文化がみられ、全てが新鮮だった。そこで体験したことは、どれもいい思い出だ。

一方で、日本との違いにはなじめない部分もあった。例えば、盗難防止のため財布やスマートフォンなどの貴重品は服の下のセキュリティポーチに入れていたし、夜道を一人で歩かない、座席に荷物を置いたままその場を離れないなど、何気ない普通の行動にも注意が必要だった。また、私の住む宮崎では減多に見かけないホームレスの人々をよく目にするのにも衝撃を受けた。これらの経験を通して、私は安心して過ごせる「当たり前」の生活について、深く考えるきっかけを得た。

一般的に、日本は世界有数の安全で平和な国とされている。世界的にみて、日本はどのような点が優れているのだろうか。調べてみて、気づいたことがある。

一つは、治安の良さだと思う。外国にはないことが多いが、日本には街のあちこちに交番があり、何かあればすぐに対応できる。さらに、交番は監視や犯罪抑止力としても治安維持に大きく役立っている。そんな交番の存在を支えているのは、税金だ。交番は税金によって設置され、パトカーの購入費や、警察官の給料にも税が使われている。税金が私たちの安全を守っているのだ。

もう一つ、福祉や医療の充実も日本の良さだ。福祉面の例としては失業や生活が苦しい場合に生活保護があり、医療面では病気や怪我の治療費が三割の負担で済むほか、外国では有料であることが多い救急車も無料で要請できる。これらの仕組みも、税によるものだ。

改めて考えてみると、私の周りには税の恩恵が溢れているように感じる。無償で提供される教科書、いつも利用している道路や橋は全て税金で作られたものだ。何より、私の両親は公務員なので給料は税金で賄われている。私の日常は、税という基盤なくしては成り立たない。

「消費税なんて余計なもの、なくて良かったのに」先日の公民の授業で、一九八九年に消費税が導入されたことについて学んだときクラスメイトが呟いた言葉だ。それが多くの人が税に対して持つ気持ちかもしれない。私自身、消費税がなければもっと安い値段でものが買えるし、他の税にしてもない方が楽だと思ってきた。私にとっても税は余計なもの、生活する限り「払う」義務的な存在だった。だが今はそうではなく、税を「納める」ことと生きることはイコールだと実感している。

普段の生活で税と関わる時は、どうしても手元から金銭が失われるイメージを抱きがちだ。しかし、だからこそ税によって得しているものの多さに目を向け、ここで生きる国民として責任をもって税を納めるべきだと私は思う。私たちの納める税金は、巡り巡って今日も私たちの日々を形づくっている。